



ISSN 0910-8785

甲虫ニュース

No. 102

COLEOPTERISTS' NEWS

June 1993



馬場金太郎博士 (1912-1993)

馬場金太郎博士追悼号

DR. KINTARO BABA MEMORIAL ISSUE

追悼記事目次

- 馬場金太郎博士を憶う 渡辺泰明——2
地下浅層甲虫相の発見者，馬場金太郎先生 上野俊——3
馬場さんの思い出話2題 森本 桂——4
巨星墜つ 黒沢良彦——5
昆虫採集学者，金太郎先生 齊藤秀生——6
馬場先生と歩行虫 笠原須磨生——6
ババムナビロコメツキのことなど 大平仁夫——7
馬場金太郎先生採集のハムシ類標本 木元新作——7
馬場金太郎博士採集の新潟県産カツオブシムシ科甲虫目録 大林延夫——8
馬場金太郎先生採集の新潟県産ツツキノコムシ科・コキノコムシ科目録 宮武睦夫・川那辺真——9
新潟県新保岳で得られたチビシテムシ 西川正明——9
故馬場金太郎博士採集の新潟県産ネクイハムシ類若干 高橋和弘・高桑正敏——10
馬場金太郎先生の思い出 久保田正秀——11

馬場金太郎博士を憶う

渡辺泰明

1993年1月6日、本会名誉会員馬場金太郎博士が脳梗塞で他界された。昆虫を心から愛し、そして昆虫の好きな人達に温かな援助を惜しまなかった博士のご逝去は誠に痛恨の極みである。

「馬場金太郎博士古稀祝賀記念会」の折に配布された印刷物(1981, 本間義治編集)によれば、博士は1912年6月28日千葉県富浦町にて出生(旧性酒井)。後に新潟県に移られ、1930年新発田中学を卒業後、新潟高等学校(1935年卒)を経て、1939年に新潟医科大学を卒業された。卒業後直ちに同大学の解剖学教室の助手に任ぜられたが、同年10月に召集を受け、1946年6月に復員されるまで中国に駐在された。この間、人体疾患と昆虫との関係について研究を続けられ、その成果を軍医団雑誌(1942, 1943)に発表されている。そして1947年5月にはアノフェレスとマラリア伝染病との関係についての研究で医学博士の学位を得られた。このほぼ1年後の1948年3月に現住所の北蒲原郡黒川村で医院を開業し、1960年には村上市瀬波にも村上精神病院を開院され、下越地域の精神医療面に多大な貢献がなされた。これらの活動の結果、1965年に新潟県精神衛生診査協議会委員に、また1969年には新潟県地方精神衛生審議会委員に委嘱されている。

このように、新潟県下の精神医療を遂行するかわら、博士は根っからの昆虫好きをいかになく発揮

された。その精力的な活動は昆虫に関心を持っている人なら誰もが知っていることで、このアマチュア昆虫学者としての一面は奥本大三郎さんによっても紹介されている(1984, 月刊アニマ, (8): 50-51)。

世間にはたくさんの昆虫好きが存在しているが、それらの人達の多くは蝶が好きだったり、蛾の世界に魅せられたり、蜻蛉にあこがれたり、あるいは甲虫に尽きぬ興味を抱いたりというように、興味の対象は特定のグループに限られている。しかし馬場博士は昆虫ならばどんな昆虫にも強い関心を示された。したがって、博士の研究対象は昆虫全般にわたり、膨大な数の昆虫を採集されると同時に、枚挙にいとまがないほど多くの研究業績を残されている。なかでも、アリゾゴクに関しては1932年の報文を皮切りに、以後数次にわたって観察結果を報告し、それらに基づいて1953年には名著として名高い『蟻地獄の生物誌』を刊行された。

また、博士は古くから佐渡島の昆虫相について調査を続けられ、その結果同島の昆虫相に本州新潟県側のそれとは異なる特異性を認め、1952年に分布境界線として「越佐ライン」を提唱されたことも重要な研究成果のひとつとして忘れることができない。

このように、ご自身が在任された新潟県の昆虫相に強い関心を持たれ、その解明には大いに尽力なされた。そのために多くの昆虫専門家を新潟県に招かれ、それらの人達と採集をとにもされることで、その方がたの専門の昆虫類の採集方法を会得され、県下の昆虫類の採集に励まれた。私も1964年の夏に博士のお招きを受けて、博士宅に3日間ほど滞在して一緒にハネカクシの採集を行ったが、その折の博士の採集にかける熱意には心から敬服させられた。そして、これらの経験をもとに将来「昆虫採集学」の分野を創造したいと熱っぽく話されたことは、今でも脳裏に強く刻みつけられている。またその折に、前年赤倉において昭和天皇にご進講された時の様子などもうかがった。

博士が新潟県下で採集された膨大な昆虫類は、博士自ら各グループにソーティングしたうえで、グループごとにそれぞれ専門家に送られ研究がゆだねられた。そしてその結果は「新潟県の昆虫I-IX」としてまとめられ、1956年から1965年にかけて順次発表されて、新潟県昆虫相の解明に大きな役割を果たした。

一方、「虫きち」を自称されていた博士は自然保護にも強い関心を持たれ、1968年の「自然保護ということ」(越佐昆虫同好会々報, (39): 1)に、次いで1970年には「眼に緑を、そして耳にさえずりを私は自然保護を叫びつづける」(昆虫と自然, 5(11): 1)を書かれ、自然環境保全を強く訴えられた。そして1972年には新潟県自然環境保全審議会委員



馬場金太郎博士(1990年5月19日、五反田「バイエルンホール」にて)

馬場金太郎博士が箸袋に書かれた和歌(1987年10月10日、居酒屋「すいえん」にて)

昆虫の
国の上
山は
温かい
可なり
み
敬
は
淋
か
り
げ
り

(蝶)

長に委嘱され、1981年の第5回全国育樹祭の折には当時の皇太子殿下、同妃殿下への説明役に当たられた。

博士は昆虫が大好きだったと同じように、昆虫を好きな人が好きだった。このため、昆虫好き人間の団体である日本昆虫学会を始め、他の学会や同好会に対して多額の経済的援助を続けられた。こうした学会や同好会が順調に活動が続けられたのは、このような博士の力に因るところが大きい。もちろん鞘翅学会もこの例外ではなく、博士からの援助が会誌発行などの会の活動の大きな支えになっている。

また、全国の昆虫学者や昆虫愛好家達が1年に1度集まる日本昆虫学会の大会を始め、折おりに開催される昆虫関係の集会の折には、夜になるとこのような人達を酒場に誘って昆虫談義に花を咲かせるのが恒例行事のようになっていた。しかし、後年体調を崩されてからは一切アルコール類は避けて、ご自身はコココーラを飲みながら昆虫好き人間達に接しておられた。そして晩年になってからは、よくご自作の和歌を披露された。越後出身の会津八一や良寛和尚に強く傾倒されてのことのようであった。「私のは和歌と言うほどのものじゃないよ。たんなる腰折れだけど……」と謙遜されながら示されるのが常

で、どんな人にも尊大ぶらない博士の人柄を感じさせた。図に掲げたものは1987年10月、鳥取大学で開催された日本昆虫学会大会の折に、居酒屋「すいえん」で昆虫好きの人間の集まりの機会に頂戴したものである。

私が博士と最後にお会いしたのは1991年8月10日である。博士が狭心症で倒れられ、一時は重態だったと知ったのはかなり日が過ぎてからだったが、この時は何うことができず、しばらくしてから黒川村のご自宅にお見舞に伺った。したがって、この時にはすでに回復されていて、昆虫に関するよもやま話を元気に語られた。そして帰りには出口までお見送りをいただいたが、これが博士との永遠の別れになってしまった。これからは昆虫関係の集会があっても、声高で話をされ、そして常に私達昆虫好き後輩を鞭達された博士にお会いできなくなったことは何とも淋しい限りである。幽明境を異にした今、もはや博士のご訃に接することができなくなったが、これからは天上の世界から鞘翅学会ならびに会員の活動を温かくお見守り下さるようお願いすると同時に、博士のご冥福を心からお祈り申しあげる次第である。
(日本鞘翅学会会長)

地下浅層甲虫相の発見者、馬場金太郎先生

上野俊一

昭和40(1965)年の大晦日に、馬場金太郎先生から一通の電報が届いた。「サンキソウデメクラチビゴミヲハッケン、ゴキタイコウ。」新潟県のどこかで、眼のないチビゴミムシが採れたのだな、ということはおよかったが、サンキソウという場所がどこにあるのかわからない。正月休みのことで、分県地図も手許になく、直接お尋ねしたほうが早いと電話をかけたら、サンキソウは三紀層(つまり新生代第三紀の地層)に決まっているじゃないか、というご返事がかえってきた。

思い違いというのは仕様のないものだが、馬場先生が第三紀層を強調されたのにはわけがある。そのころの知識では、眼のないチビゴミムシがすんでいるところは、古生代の石灰岩層に限られると思われていた。それが中生代をとばして新生代の地層に現われたのだから、たしかに大事件だった。しかも、その2年あまり前に、やはり馬場先生によって発見された、短足地中性のヨネヤマメクラチビゴミムシなどところが、肢の長い大型種だということだから、馬場先生に“乞われる”までもなく、期待は大きくふくらんだ。

翌年、現地へ案内していただいて驚いた。海岸からいくらか離れていない低い丘陵は、雑木林の伐採されたあとで丸裸、メクラチビゴミムシどころか碌な虫がいそうにもないところである。その斜面をゆるやかに登る山道の山側に、採石場と見紛うほど

掘りこんだところがあって、露出した母岩のうえに日光が照りつけている。母岩をおおう土壌の厚さはおよそ2m。その下の、ぐずぐずに風化した頁岩の割れ目に、メクラチビゴミムシのコロニーがあり、大型のハサミコムシやガロアムシなども、いっしょにすんでいたということだった。こんなに深い地中から昆虫を採集した人は、もちろんそれまでにはなかったし、そのような場所にメクラチビゴミムシがすんでいようとは、世界中でだれ一人として思いつかなかったのである。

道端の石の下からたまたま見つけたチビゴミムシは、そんなところへ1ぴきだけ湧き出したはずがない、どこか近くに親も兄弟もいるはずだ、というので、すぐ横の斜面をどこまでも掘り上げて、ついに本来の生息場所を突きとめられた先生の執念には、まったく頭がさがったが、その当時のわたしには、この大発見をさらに発展させられる知識の蓄積がなく、それを手掛りにして地下性甲虫類の実態を追究する能力もなかった。のちにエチゴメクラチビゴミムシと命名したこの甲虫が、太平洋側に分布する種群のものに近いことをふしぎに思うだけで、越後から東京の近くまで穴を掘って歩き、生息分布を解明しようなどとは、夢にも考えなかったのである。

馬場先生の発見が、どれほど重要な意味をもつものだったかがわかるのは、1970年代も半ばを過ぎてからのことである。富士山の溶岩洞動物相の研究

から、陸生洞窟動物の起源に疑問をもち、試行錯誤を繰り返したすえに行き着いたところが、まさしくエチゴメクラチビゴミムシの生息場所と同じような環境だった。つまり、厚い土壌層の下の、風化した母岩と粘土との混じり合った層で、わたしが地下浅層と名づけたこの環境こそ、いわゆる陸生洞窟動物の本来のすみ場所だったのである。

この一連の研究で、のちに日本動物学会賞をいただくことになるのだが、わたしの受賞をだれよりも喜んでくださったのが馬場先生だった。しかし、わたしにすれば、せっかく先生が与えてくださった手

掛りを、まともに展開できなかった負目があり、ただただ不明を恥じ入るばかり、もっと鋭い閃きがあれば、途中の段階を飛び越えて、一挙にゴールへ到達できたはずだったのだ。貧乏学者の仕事に時間がかかるのは仕方がないよ、それでも結局はすばらしい成果をあげたのだから結構じゃないか、という馬場先生の慰めの言集を昨日のこのように思い出しながら、わたし自身の研究にも日本鞘翅学会の発展にも温かいご支援をいただいた、馬場金太郎先生のご冥福を、心からお祈りしている。

(国立科学博物館動物研究部)

馬場さんの思い出話 2 題

森 本 桂

中條道夫先生と共著で「馬場金太郎博士採集の新潟県産象鼻蟲類(第1報)」を『新潟県の昆虫』第2輯(1957)に発表以来、馬場先生は毎年大量のゾウムシ類標本を調べる機会を与えてくださった。晩年採集された台湾産の膨大な標本は、新種や問題種があまりにも多くて調査に時間がかかり、ついに報告をお見せできなかったのが残念である。馬場博士の発見されたゾウムシ類の新種は7種で、内4種に *babai* の種小名が奉獻されている。

1: ババアカサルゾウムシの話

Coeliodes babai Voss et Chūjō, 1960 は新潟県黒川産の1雄で記載され、その後はまったく採れない珍種である。写真はタイプ標本で、体長2.5 mm、上翅にある赤褐色の不明瞭な2横帯が特徴である。

1962年日本産ゾウムシ科目録を編纂した際、すべてのゾウムシに和名を付けたが、この種だけは標本がなく和名のイメージが浮かばない。*Coeliodes* 属の基本和名をアカサルゾウムシとしたので、種小名からババアカサルゾウムシとしたいが、赤ら顔のモンキーおやじといった感じから怒られるかも知れないという心配があった。そこで、中條先生にお伺い

を立てたところ、その心配なしとのことでこの和名を付けることにした。30年以上も昔の話である。

2: パプアニューギニアのクロツヤムシの話

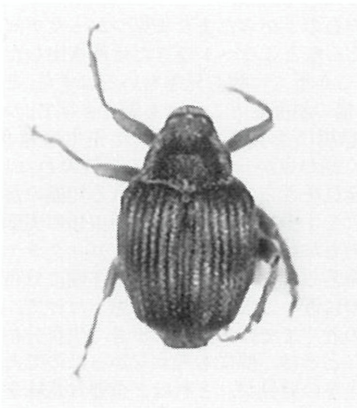
馬場先生は Gressitt 博士の設立したパプアニューギニアの Wau Ecology Institute を財政的に支援しておられた。このことは Gressitt & Hornabrook (1977) Handbook of Common New Guinea Beetles の冒頭にある謝辞でも明らかである。平嶋教授は昭和57年に海外研究でパプアニューギニアの調査を計画されたが、馬場先生もこの縁で平嶋隊に同行することになり、病後の体を心配されながら出発の準備を進めておられた。この年の4月26日中国桂林での航空機事故で Gressitt 博士夫妻が死亡するという惨事があったが、平嶋隊は予定通り7月11日に福岡空港を出発された。「虫を採りに行って死ねば本望よ」というのが馬場先生の言で、学会出席の際よりも身軽な手荷物量で発された。

7月25日の日曜日、博多のホテルから「今帰ったぞ、すぐ出て来い」という元気な電話が馬場先生からあり、出発前とは打って変わった元気で採集珍談がほとばしり出た。

“Wau では Gressitt House に泊まり、元気の良い連中はどこかへ出掛けたので、1人で採集に出た。山道を少し上った所に大きな朽木があり、崩すと中から大きなクロツヤムシが出てきた。小さなナイフで一生涯懸命崩してやっと6頭採集した。この珍品を見せて他の連中をあっど驚かせてやろうと早く帰り、生きたまま木屑とビンにいれて玄関近くの台の上に置き、それとなく気付くようにしておいた。帰って来た連中は誰もこの虫に気付かないのか一向に驚く気配がない。そこでビンを取り出し、どうだと見せたが、「それは沢山いますよ」と、一言のもとに片付けられた。「いいものを採りましたね」とお世辞を言うくらい気遣いも連中にはない……”

2年後に私も同じ場所で採集したが、これがと思われる朽木があり、クロツヤムシが生息していた。

(九州大学)



ババアカサルゾウムシ、タイプ標本

巨星墜つ

黒 沢 良 彦

「生誕ここに一年と春は再び廻り来ぬ、草木緑に萌え出でて雲雀は高く唱うなり、若き誇りの二百人陽光を浴びて丘に立つ。」

これは旧制新潟高等学校（現在の新潟大学）の寮歌の第一節である。昭和15（1940）年の秋、旧制山形高等学校（現在の山形大学）の寮生だった私は、対校試合の応援のためにやって来た新潟高校生たちの斉唱する上記の寮歌を始めて聞いた時の感激が忘れられず、その歌詞を求めてそれを空んじてしまった。以来私は新潟高校を他校とは考えられず、まるで姉妹校ででもあるかのような親近感を懐くようになった。

馬場金太郎博士はその旧制新潟高校の出身であり、生物研究会を主宰されて大活躍をされたお方で、しかも私が興味を持っていたマイマイカブリの研究者でもある。私が親近感を懐くのも当然であった。

しかし、私が馬場さん（失礼ではあるが、以後親近感をこめてこう称させて頂く）と連絡を持ったのは、これよりずっと以前、昭和12（1937）年、私が中学4年生だった時である。コレクターの卵の誰でもがそうであるように、当時の私は、受験勉強を強要する親の眼を盗んで標本集めに狂奔していた。そんな折り、加入していた学会の機関誌の誌上で馬場さんの名声を知り、どうしてもサドマイマイカブリが欲しくなって、意を決して馬場さんに交換を申し込んだ。曰く、「私はオサムシ好きの1中学生です。誌上で御高名を知った。当方に山形県米沢地方産のマイマイカブリがあるが、サドマイマイカブリと交換して頂けないものであろうか。」折返し馬場さんからの交換を承諾する旨の丁寧な返事が届き、サドマイマイカブリ1♀が送られて来た。その巨大さに驚いた私は、その標本に付いていたラベル代りの紙片を見て二度驚くことになった。そこには「佐渡水津、1936.9.16.死亡」と筆太に大書されていた。私たちはラベルに何年何月何日採集または何日採と書く。飼育している虫が死んでも何日死と書くのが普通である。それが人間並みに「死亡」である。私は馬場さんのマイマイカブリに対する深い慈しみを感じ、と同時になぜか馬場さんと言うとこの二字を思い浮かべる。それが馬場さんの死亡の報せを受けようとは、なんとも悲しいことである。

馬場さんからの標本に対し、私からは早速米沢産のマイマイカブリ（コアオマイマイカブリ）♂♀各数頭をお送りした。しかし、この標本が、コアオマイマイカブリ *Carabus (Damaster) fortunei montanus* BABA, 1939 (= *Damaster blaptoides babaianus* ISHIKAWA, 1984) の模式標本となっていようとは、久しい間、私が東京に出て来るまで知らずにいた。

私が初めて馬場さんにお目にかかったのは戦後になってからで、昭和23（1948）年7月5日のことで

ある。当時長岡市におられた野平安芸雄博士を訪ねた中根猛彦君と私は、長岡から会津若松にもどる車中で、馬場さんを訪れようとの中根君の提案に従い、羽越線の小駅、平木田に降り立った。水田の中を小一時間歩いて馬場さんの黒川病院に着いた私たちを、まったくの突然だったにも拘らず、馬場さんは快よく迎えて下さった。虫屋のご多分にもれず早速虫談開始。やがて玄関先に一人の男がやって来た。「盲腸だあ、先生、診て下せえ。」「今珍客のもてなし中だ、明日来い。」「明日は日曜で、先生。」「ああそうか、そんなら明後日来い。」「明後日は法事で来られねえだ。」「えい面倒だ、だら勝手な時に来い。」患者はそのまま帰って行った。啞然としていた私たちは、恐る恐る「よろしいのでしょうか？」とお伺いを立てた。これに対して馬場さんの答えは、「ワッハハハ、あいつは慢性だ。」と涼しい顔であった。盲腸炎にも慢性があることを私はこの時始めて知った。事実、翌日の午後私たちが黒川病院を辞するまでにこの患者はついに姿を現さなかった。

昭和31（1956）年7月2日、朝比奈正二郎博士と私は馬場さんの招きで苗場山とその西側の中津川溪谷の調査に出かけた。翌3日、馬場さんを含む調査隊の一行は中津川溪谷にある逆巻温泉から金城山に至る登山道の急坂に喘いでいた。途中で休息をとることになり、急坂に、朝比奈、馬場、それに私の順に腰を下した。その時、馬場さんの腰を下した大きな石の下から、思いもかけず、1匹の黒いゴミムシが這い出して来た。急斜面だから私の顔にもっとも近い。当然私が見付けて殺虫管に収めた。よく見ると、なんと、当時は数えるほどしか採れていなかったニッコウオオズナガゴミムシではないか。お蔭で私は終生馬場さんから、「俺の尻の下から珍品を引き出す図々しい奴がけつかる。」と恨まれることになってしまった。もちろんつかまえた虫は馬場さんに取り上げられてしまったが。

甲虫談話会が財政難で喘いでいた頃、馬場さんに援助をお願いしたことがあるが、快く大金を寄付して頂いた。お蔭で『甲虫ニュース』の発行を何とか続けることが出来たが、今では遠い昔の思い出となってしまった。

以上、長々と馬場金太郎博士の思い出を綴って来たが、どこからか、「ワッハハハ」と馬場さん特有の高喉いが聞こえて来るような気がする。妄言お許しのほどを。

花開き春は廻れどきみは居ず

悲しいかなや巨星は流れぬ

(東京都世田谷区)

昆虫採集学者、金太郎先生

齊藤 秀生

私が馬場先生とお会いするのは、昆虫学会や鞘翅学会などの会場である。先生は特に分類関係の発表をよく聞かれ、最前列に座りほとんどの講演に対し積極的に質問をされていた。形態の比較による分類の講演に対しては、生時の状態はどうか、屋内実験による生態や行動の講演に対しては、自然状態ではどうか、といった内容の質問が多かったように思う。これは、先生が昆虫を研究する際は、生きている虫に多く接していなければならないというお考えによるものであったのだろう。

先生は講演後の飲み会には特に甲虫の分類学者を中心にさそって下さり、その折昆虫に関するおはなしをお聞きするのが大変楽しみであった。昆虫学の大先生方の若い頃の失敗談や虫が採れなくて四苦八苦していた様子を滑稽にはなしてくださった。また、私達は「人間がその存在も知らずに、絶えていってしまう昆虫がいるとしたら、とても悲しいことだ」、若い分類学者がもっと活躍して欲しいとはげまされたものである。さらに、先生の見聞は「昆虫採集は学問である」というものであった。昆虫を採集するには多くの経験と知識が必要で、その際に

得られた情報を理論的に整理すると学術論文になるが、まだ整理されていない中に多くの重要な情報が宝物のように詰め込まれていると考えておられた。私達に対して、今では著名な先生方もみんな若いときは採集ばかりしている「虫きち」だったとあって、昆虫採集の重要性をお話し下さった。

このような馬場先生のお考えを元に1991年に九州大学出版会より「昆虫採集学」が発行されたが、私の印象ではこの出版物と先生の考えておられた「昆虫採集の中に隠れている宝物」の内容は少し違っていたように思う。夜間採集のスクリーンの色を白から薄い青に変えると昆虫が多く集まることや、哺乳類に紙コップをいたずらされないためのベートなど、ささいな工夫から始まる昆虫学であり、現状では理論的裏づけがないが、実際に野外で生きた虫と接して得た経験や知識をまとめたものが、馬場先生の言われた昆虫採集学に近いように思う。

可能ならば当学会有志で先生のお考えに近い「昆虫採集学」を作れたら素晴らしいと思ひ、広く学会員に提案するとともに、馬場金太郎先生のご冥福をお祈り致します。(千葉県千葉市)

馬場先生と歩行虫

笠原 須磨生

日本産昆虫総目録索引(1989,九州大学)によると、馬場金太郎先生に献名された昆虫は、さまざまな分類群にわたって60余種に及び、5種が歩行虫である。一方、先生が土生昶申博士、上野俊一博士とそれぞれ共著で記載された歩行虫の新種・新亜種は15種を数え、この類に関する先生の造詣がうかがえる。先生のマイマイカブリについての先駆的研究は有名だが、1972年に発表された土生博士と共著の「新潟県の歩行虫科」(越佐昆虫同好会々報,4(1))は、オサムシ族を除く325種をようし、久しくゴミムシ屋の鑽仰のままであった。当時、これほど多数の種と産地を収録した一冊の目録は他になく、「あのコンビではちょっと太刀打できないよ」というのが誰しもの偽わらざる感想であった。また、表紙を飾るヨネヤマメクラチビゴミムシ *Kurasawatrechus endogaeus* S. UENO et BABA と生息地の写真も見すげせない。それまで、石灰岩地帯の鍾乳洞にのみ生息すると思われていたメクラチビゴミムシが、馬場先生によって初めて泥岩の裂隙から発見され、この類の本来の生息環境が地下浅層であることがわかった記念碑的業績となったものだからである。以来、先生は「土工のように岩盤を掘り進んでメクラチビゴミムシの類を求め」ることになる(馬場金太郎,1969.虫きち,p.194)。

この例のみならず、馬場先生が創意工夫をこらし



1987年3月21日,新宿車屋にて

て発見採集された昆虫は、日本産に限っても優に100種を越える。その偉業は、先生が永年提唱されて来た昆虫採集学と表裏をなすもので、先年上梓された大冊『昆虫採集学』はその結実であり、虫屋に残された先生の大きな遺産である。

先生は、甲虫談話会や鞘翅学会の例・大会のたびに上京され、虫屋との歓談をなよりの楽しみとされた。懇親会や二次会では過分の御馳走にあずかったものである。先生を上野駅近くの常宿へお送りするのが私の役目であったが、車中よく往年のゴミムシ採集談を伺った。またしばしば採集費や標本箱を買うようにと小遣を頂いた。「君は絵描きで貧乏だが、私は金持ちだぞ」といって封筒を渡される時の先生の温かな目指しを忘れることができない。

(千葉県船橋市)

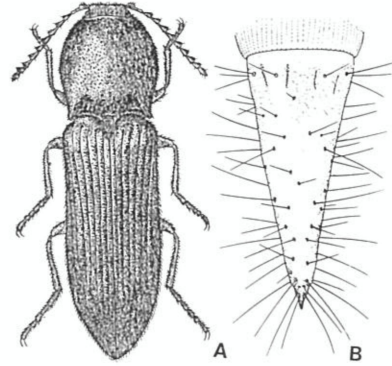
ババムナビロコメツキのことなど

大平 仁 夫

筆者が馬場先生採集のコメツキムシ類を調べ始めたのは1955年頃からである。どういふわけか知らないが、ずいぶん厚意をもって指導して頂いたように思う。先生から次から次へと標本が送られてきて、整理できたものから先生と共著で主として越佐昆虫同好会々報へ発表した。印刷費や別刷代はすべて先生が負担して下さい。先生の標本は一方を糊付けにした三角紙にラベルと共に無造作に入っていて、台紙に付けて整理するのは容易であったが、その量の多さは異常で、サビキコリのような普通種がときに数十個体も入っていることがあった。しかし、標本については何の制約もなく、自由に研究することができた。

1955年に馬場先生から佐渡島で採集されたコメツキムシ類が送られてきた。その中に樋熊清治氏が佐渡島相川町達者で1955年5月3日に採集された体長9mmほどの黒色をした種が含まれており、色々調査した結果、新属新種であることがわかったので、1956年に *Sadoganus babai* と命名して記載した (Kontyū, 24: 8-18)。樋熊氏が採集したのに *babai* というのは妙なことであるが、たぶん佐渡島へ同行された馬場先生に献名して下さいということではなかったかと思う。和名はババムナビロコメツキである。このとき、どうしてか先生はあまり喜ばれなかったように記憶している。どうも呼び名からくる印象が良くなかったからのようで、あとで *kintaroui* としておけば良かったと思った。

本種はその後、北海道から九州まで点々と分布することが知られているが、東北地方と四国からは未



ババムナビロコメツキ (A) と幼虫の第9腹節 (B)

知である。本種は一般に河原や谷川の小石の下側などに生息、河川と何か関係があるように思われる。また、1957年に岐阜の長良川の河原で幼虫を採集、飼育の結果本種であることが判明した。老熟した幼虫は8月下旬から9月にかけて蛹になる。しかし、幼虫の形態は特有で、現在はカバイロコメツキ属 (*Ectinus* 属) などの近くに置かれているが、現在1属1種で、系統的にはこれとはかなり離れた位置にある属の種のように思われる。先生がこの上なく愛された佐渡島と先生の名前がついたこの種はいつまでも先生を偲ぶすがにしたいと思うが、一方で本種は系統のはっきりしない普通でない存在でもあるわけで、その意味からも本種は馬場先生にふさわしい名であると思う次第である。(愛知県岡崎市)

馬場金太郎先生採集のハムシ類標本

木元 新作

九州の田舎住いのこともあって、私が馬場金太郎先生の訃報に接したのは2月に入ってからのことであった。馬場先生の昆虫学界への貢献については、多くの方が既に書かれているので、ここでは馬場先生から提供を受けた標本類についての研究結果を報告し、馬場先生をしのぶこととする。

馬場先生の採集された標本の提供を最初に私が受けたのは、八重山諸島産のハムシ類であった。この標本を受取った時期は正確に記憶していないが、おそらく1970年代後半のことであったと思われる。私はその時期、毎年のように沖縄各地の調査を実施しており、偶然那覇で馬場先生とお会いし、琉球大学の東清二さんと一緒に食事に誘われ、ご高説を承わることもあった。そのような事情で、この標本は大変私にとって貴重であり、これをまとめて報告したのが下記の印刷物である。

木元新作, 1979. 馬場金太郎博士採集の八重山諸

島産ハムシ類, 越佐昆虫同好会々報, (50): 1-5.

当時、南西諸島の調査を続けておられた馬場先生から、その後も引続き標本の送付があり、これらをまとめたのが次の報告である。

木元新作, 1982. 馬場金太郎博士採集の琉球産ハムシ類, 越佐昆虫同好会々報, (53): 63-67.

その後、馬場先生はその調査の範囲を東南アジア各地に拡大され、特に1980年代にはほとんど毎年のように台湾各地で昆虫採集に従事され、私に莫大な標本の研究を依託されたのである。これらの採集品によって、私は次の2つの報告書を作成した。

KIMOTO, S., 1989. The Taiwanese Chrysomelidae collected by Dr. Kintaro Baba, on the occasion of his entomological survey in 1983 and 1986. *Kurume Univ. J.*, 32 (2): 237-272.

KIMOTO, S., 1991. The Taiwanese Chrysomelidae collected by Dr. Kintaro Baba, on the occa-

sion of his entomological survey in 1987, 1988 and 1989. *Kurume Univ. J.*, **44** (1): 1-27.

なお、上記の印刷物は海外でのサーキュレーションが良くないので、新属や新種の記載などは、別の論文として下記のような印刷物とした。

KIMOTO, S., 1989. Description of a new genus and three new species of Taiwanese Chrysomelidae collected by Dr. Kintaro Baba, on the occasion of his entomological survey in 1986. *Ent.*

Rev. Japan, **44**: 73-78.

KIMOTO, S., 1991. Description of a new genus and six new species of Chrysomelidae collected by Dr. Kintaro Baba in Taiwan, China. *Ent. Rev. Japan*, **46**: 13-20.

なお、現在これらの研究に使用された標本類は、私が所蔵する一部を除き、大部分のものは新潟県の黒川村昆虫館に所蔵されている。

(福岡県久留米大学)

馬場金太郎博士採集の新潟県産カツオブシムシ科甲虫目録

大林 延 夫

馬場先生にいただいたままになっていたカツオブシムシ科甲虫のうち、新潟県産種のリストを報告する。このうちケカツオブシムシ属(*Trinodes*)の1種は未記載種と思われるが、今後の標本の追加を待って検討したい。なお、採集地データの N. E., M. E., S. E. はそれぞれラベルの N. Echigo, M. Echigo, S. Echigo を省略したものである。

1. *Dermestes vorax* MOTSCHULSKY アカオビカツオブシムシ
Mimoto, N. E., 1♂, 16. V, 1976. Murakami, N. E., 1♀, 29. II, 1960.
2. *Dermestes ater* DEGEER トビカツオブシムシ
Shibata, N. E., 1♂, 2. VII, 1954; 1♂, 4. VII, 1954; 1♀, 27. VII, 1955. Kurokawa, N. E., 1♀, 17. VI, 1955; 1♀, 8. VI, 1959; 1♂, 24. V, 1960; 1♀, 9. IX, 1959; 1♀, 29. VII, 1956; 1♀, 28. VIII, 1955. Nakagô-mura, S. E., 1♀, 14. VII, 1967. Nakaoka, Sado, 1♀, 17. VI, 1961. Ryôtsu, Sado, 1♀, 16. IX, 1967. Ookura, Sado, 1♀, 18. X, 1962.
3. *Dermestes freudi* KÁLIK et N. OHBAYASHI スジカツオブシムシ
Kurokawa, N. E., 1♀, 21. VI, 1961.
4. *Dermestes tessellatocollis* MOTSCHULSKY ケアカカツオブシムシ
Muramatsu-hama, N. E., 1♀, 23. V, 1956.
5. *Dermestes coarctatus* HAROLD カドムネカツオブシムシ
Iwagasaki, N. E., 1♀, 16. VII, 1961. Niigata-shi, N. E., 3♂♂, 5. V, 1933.
6. *Attagenus unicolor japonicus* REITTER ヒメカツオブシムシ
Kurokawa, N. E., 1♀, 10. VI, 1976; 1♀, 12. VI, 1956; 1♀, 15. VI, 1955; 1♂2♀♀, 17. VI, 1956; 1♂, 5. VI, 1977. Shibata, N. E., 1♀, 21. VI, 1955. Yuzawa-spa, M. E., 1♀, 19. VI, 1962. Myôkô-spa, S. E., 1♂, 11. VI, 1962. Oda, Sado, 1♂, 20. VI, 1963.
7. *Trogoderma longisetosum* CHAO et LEE クロマダラカツオブシムシ

- Mt. Jigami, Mts. Iide, N. E., 1♂, 27. VII, 1956.
8. *Thaumaglossa ovivora* (MATSUMURA et MATSUSHITA) カマキリタマゴカツオブシムシ
Kurokawa, N. E., 3♂♂10♀♀, 10. IV, 1961; 4♂♂6♀♀, 15. IV, 1961.
9. *Anthrenus nipponensis* KÁLIK et N. OHBAYASHI シロオビマルカツオブシムシ
Kurokawa, N. E., 1♂2♀♀, 21. V, 1956. Senami, N. E., 1♂2♀♀, 17. V, 1973. Mt. Myôkô, S. E., 1♀, 18. V, 1976. Ookura, Sado, 1♀, 31. V, 1963.
10. *Anthrenus verbasci* (LINNÉ) ヒメマルカツオブシムシ
Senami, N. E., 5exs., 4. VI, 1959; 1ex., 17. VI, 1977; 7exs., 17. V, 1973. Ooshima, N. E., 1ex., 17. V, 1967. Agekawa, N. E., 3exs., 24. IV, 1966. Murakami, N. E., 3exs., 24. V, 1959. Kurokawa, N. E., 2exs., 4. VI, 1961; 1ex., 15. V, 1956; 2exs., 15. V, 1972. Shibata, N. E., 3exs. 21. V, 1958. Niigata-shi, N. E., 3exs., 22. V, 1933. Iwasawa, Asahimura, N. E., 4exs., 15. VI, 1959. Sakasamaki, M. E., 1ex. 1. VII, 1956. Katamachi, S. E., 7exs. 9. V, 1966. Oomi-machi, S. E., 3exs., 14. VI, 1980. Oda, Sado, 1ex, 20. VI, 1963.
11. *Anthrenus japonicus* N. OHBAYASHI チビマルカツオブシムシ
Senami, N. E., 5♂♂5♀♀, 17. VI, 1977. Mikuni-tôge, M. E., 1♀, 30. VI, 1962. Sakasamaki, M. E., 1♀, 1. VII, 1956. Myôkô-spa, S. E., 10. VI, 1962. Sasagamine, S. E. 1♀, 16. VII, 1976.
12. *Trinodes rufescens* REITTER チビケカツオブシムシ
Aoneba-goe, Sado, 1♂, 7. VI, 1936. (BABA, SUZUKI & SAWANO leg.)
13. *Trinodes* sp.
Kurokawa, N. E., 1♂, 24. VI, 1957.

(愛媛大学)

馬場金太郎先生採集の新潟県産ツツキノコムシ科・コキノコムシ科目録

宮 武 睦 夫・川 那 部 真

ずいぶん昔に馬場先生から届けられたこれらの甲虫は、先生の採集品としては意外に少ない。その旨先生に申し上げたところ、自分で採集に來なさいといわれ、ひそかに多くの種類を追加して先生を驚かせようと思いつつ、発表の機会を逃していたものである。このたびの追悼号にお詫びの意を込めて報告する。なお、ツツキノコムシ科は川那部が、コキノコムシ科は宮武がおもに同定した。

Ciidae ツツキノコムシ科

1. *Cis nipponicus* CHŪJŌ ミヤマツツキノコムシ
Takane, N. Echigo, 8. V. 1967, 1♂. Shimoseki, N. Echigo, 20. V. 1967, 1♂1♀. Kurokawa, N. Echigo, 23. IV. 1973, 12♂11♀.
2. *Cis seriatulus* KIESENWETTER ミツアナツツキノコムシ
Shimoseki, N. Echigo, 8. V. 1967, 4♂♂2♀♀
3. *Cis hieroglyphicus* REITTER ゴマフツツキノコムシ
Kurokawa, N. Echigo, 10. V. 1965, 1♀. Takane, N. Echigo, 8. V. 1967, 1♀. Shimoseki, N. Echigo, 20. V. 1967, 1♀.
4. *Cis seriatopilus* MOTSCHULSKY キタツツキノコムシ
Kurokawa, N. Echigo, 19. VII. 1957, 1♂; 14. VIII. 1964, 2♂♂. Tanikawa, S. Echigo, 22. VIII. 1959, 1♀. Senami, N. Echigo, 17. VII. 1962, 1♂1♀. Mikunitoge, M. Echigo, 15. VIII. 1966, 2♂♂. Takane, N. Echigo, 8. V. 1967, 1♀. Miomote, N. Echigo, 21. VIII. 1967, 1♀.
5. *Cis* sp.
Shibata, N. Echigo, 17. VI. 1951, 3♂♂ (2exs., H. KOIKE)
6. *Orthocis* sp.
Kurokawa, N. Echigo, 19. VII. 1957, 1♂1♀.
7. *Sulcaxis affinis* (GYLLENHAL) トゲヒメツツキノコムシ
Kurokawa, N. Echigo, 15. VII. 1954, 3♂♂. Tsunagi, N. Echigo, 19. VII. 1961, 10♂♂. Mt. Hiuchi, S. Echigo, 27. VIII. 1966, 3♂♂.
8. *Octotemnus laminifrons* (MOTSCHULSKY) ツヤツツキノコムシ
Shimoseki, N. Echigo, 8. V. 1967, 3♀♀. Kurokawa, N. Echigo, 20. V. 1967, 2♂♂2♀♀.
9. *Octotemnus japonicus* MIYATAKE カタキバツツキノコムシ
Shimoseki, N. Echigo, 20. V. 1967, 1♂1♀.
10. *Octotemnus parvulus* MIYATAKE ヒメツヤツツキノコムシ
Shimoseki, N. Echigo, 8. V. 1967, 1♀.

Mycetophagidae コキノコムシ科

1. *Mycetophagus antennatus* (REITTER) ヒゲブトコキノコムシ
Akadani, N. Echigo, 25. VII. 1954, 1ex. Kurokawa, N. Echigo, 12. VII. 1959, 4exs. Muramatsu, N. Echigo, 17. VII. 1972, 2exs. Mt. Yoneyama, M. Echigo, 11. VII. 1970, 1ex. Mt. Donden, Sado I., 23. VII. 1970, 2exs.
2. *Mycetophagus ater* (REITTER) クロコキノコムシ
Mt. Monnai, N. Echigo, (1800 m), 24. VII. 1972, 1ex. Kanamazu, 16. IX. 1961, 1ex.
3. *Mycetophagus hillerianus* REITTER ヒレルコキノコムシ
Kurokawa, N. Echigo, 14. II. 1955, 1ex. Nakajō, N. Echigo, 9. VII. 1967, 1ex.
4. *Mycetophagus pustulatus* (REITTER) コマダラコキノコムシ
Kurokawa, N. Echigo, 10. IX. 1968, 2exs.; 4. VIII. 1970, 2exs. Tsugawa, N. Echigo, 8. V. 1976, 2exs. Niigata, N. Echigo, 22. III. 1973, 1ex. Mikuni-toge, M. Echigo, 1. VII. 1967, 1ex. Asagai, M. Echigo, 23. VI. 1967, 1ex. Okutadami, M. Echigo, 30. VII. 1961, 2exs.
(愛媛大学)

◎新潟県新保岳で得られたチビシテムシ
(チビシテムシ科分布資料 7)

数年前、故馬場金太郎先生とお話をする機会があり、筆者がチビシテムシ科甲虫に興味を持っていることをお伝えしたところ、ほどなく新潟県北部の新保岳で採集された同科甲虫を恵与された。新保岳は村上市の北北東約 5 km に位置する標高 852 m の山である。

採集品は 5 属 6 種に分類されたが、種名未定の *Catops hilleri* グループに属するものを除き、ここに公表しておきたい。先生の生前に公表しなかったことが悔まれる。

Nemadus asagi M. NISHIKAWA タンザワヒメチビシテムシ, 1♂.

Prionocheata harmandi PORTEVIN オオクロチビシテムシ, 1♂.

Sciodrepoides fumatus (SPENCE) カバイロコチビシテムシ, 2♂♂1♀.

Mesocatops japonicus (JEANNEL) ホソムネコチビシテムシ, 7♂♂8♀♀.

データはいずれも新潟県岩船郡新保岳, 22. V. 1987, 馬場金太郎採集である。

(神奈川県海老名市, 西川正明)

故馬場金太郎博士採集の新潟県産ネクイハムシ類若干

高橋和弘・高桑正敏

馬場金太郎博士が1986年に新潟県内で採集されたネクイハムシ類3種を頂戴しているの、ここに記録しておくことにする。また、オオネクイハムシについては若干の新しい知見が得られたので、あわせてメモしておくこととした。生前たびたびお世話を頂いた馬場博士に厚くお礼申し上げるとともに、心からの御冥福をお祈り申し上げます。

ヒラタネクイハムシ *Donacia (Donacia) hiurai*
KIMOTO

南蒲原郡下田村吉ヶ平, 11. vi. 1986. 1頭。
オオネクイハムシ *Plateumaris (Plateumaris) constricticollis* (JACOBY)

一岩船郡朝日村高根, 16. vi. 1986, 1♂7♀♀; 岩船郡関川村沼, 12. vi. 1986, 3♂♂4♀♀; 南蒲原郡下田村吉ヶ平, 11. vi. 1986, 307頭。

朝日村産はいずれも黒色、腿節後半部は黒～暗色だが、1頭だけは腿節全体が赤褐色のものであった。関川村産はすべて紫黒～黒色、腿節全体が赤褐色であった。これに対し、下田村産は興味深いことに体の色彩差が顕著で、139頭は紫黒色～黒色、残り168頭が銅～赤銅～銅緑～緑色(赤銅～銅緑型がもっとも多く、銅型と緑型は少ない)であり、また、腿節は後半部が黒～暗色だが、暗色部が著しく縮小したものも認められた。各産地の♂交尾器(背片)を図1に、♀の第8節背板を図2に示す。♀の第8節背板には地域による差はあまり認められないが、♂の交尾器にはやや注目すべき変異が認められた。とくに関川村沼の産地ものは側部の張り出しが弱いことや、先端部が細まらず、わずかに凹みが認められる個体もあることなど特異な傾向があった。一方、下田村産の交尾器は側部の張り出しは比較的顕著であるが、先端部の形状にかなりの個体変異が認められ、個体によって先端部の凹みが目立ち割れ目状になるものすらあった。

オオネクイハムシには地理的な変異が多く認められ、現在4亜種に分割されているが、このうち下田村産は馬場博士が発見し、中條道夫博士によって命名された亜種 *babai* の基準産地である。ところで、交尾器背片先端部の凹みの存在と腿節が赤褐色になる点は、いずれも基準亜種の特徴であり、*babai* と区別する上での重要なポイントとなっているが、今回の検討の結果では、交尾器背片先端部の凹みの有無については、単純には基準亜種との識別に使用できないことが明らかとなった。ただし、この点については基準亜種ではこの凹みが安定的に出現することから、それに続く縦溝状の部分をもっていることから、凹みの形状を比較することによって、ある程度の区別は可能である。また、交尾器背片の側部が張り出すことが *babai* の特徴とされているが、この点については図示したように個体変異がみられ、明確な区別点にはならないようである。

以上の結果から判断すると、朝日村産については腿節の色彩や♂交尾器の形状から *babai* に含まれるものと思われる。ところが、関川村産に関しては、すでに述べたとおり、腿節全体が赤褐色であり、なおかつ♂交尾器の形態にも基準亜種にある程度類似する要素をもっており、両亜種の間型ともいえる形質をもった個体群であると見なされる。図3にこの付近における基準亜種と *babai* の文献による記録と今回報告した産地を示した。両亜種の分布境界付近では、一般的に北よりに基準亜種が分布し、その南側に *babai* が分布するのが通常のパターンである。ところが、関川村より北方に位置する朝日村産は1頭を除けば典型的な *babai* であるのに対し、関川村産は両亜種の間型と考えられる個体群であった。これらの結果から、筆者らは次のように推察した。すなわち、この地域周辺では両亜種の分布境界が複雑に入り組んでおり、場所によってはその両亜

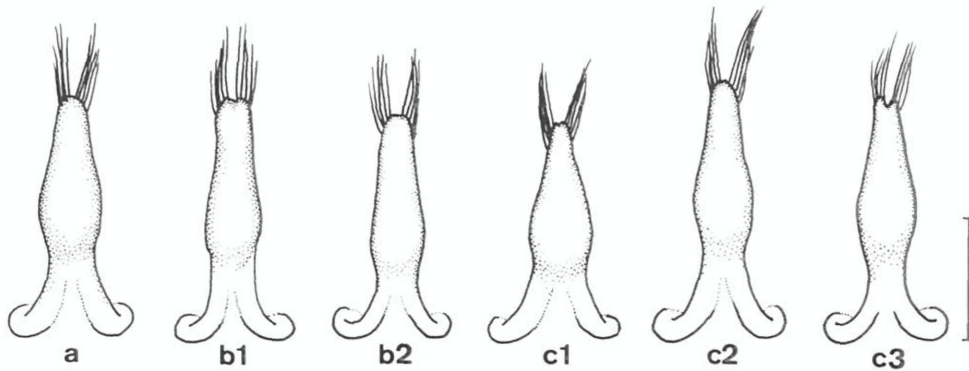


図1. 各産地のオオネクイハムシの♂交尾器背片先端部(背面)。a: 朝日村高根; b: 関川村沼; c: 下田村吉ヶ平。

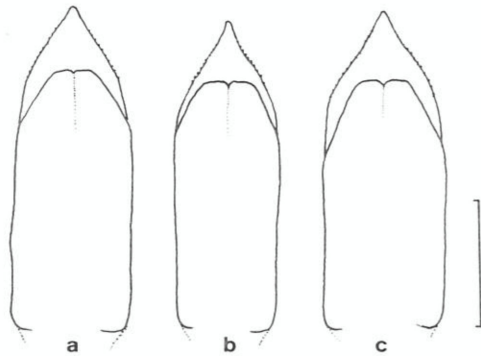


図2. 各産地のオオネクイハムシの♀第8腹節背板。
a: 朝日村高根; b: 関川村沼; c: 下田村吉ヶ平。

種の分布が重なり合い、交雑が行われたのではないかとことである。その典型的な場所こそが関川村であった、と考えると理解しやすいのであるが、いかなものだろうか。いずれにせよ、この周辺でのさらに徹底的な分布調査の必要性が、改めて認識される結果となった。

スゲハムシ *Plateumaris (Euplateumaris) sericea* LINNÉ



図3. 新潟県、山形県、福島県付近におけるオオネクイハムシ各亜種の分布状況と今回報告した産地。
○: 基亜種; ●: ssp. *babai*; ◎: 中間型?。
a: 朝日村高根; b: 関川村沼; c: 下田村吉ヶ平。

岩船郡朝日村岩崩, 23. v. 1986, 13 頭; 同, 12. vi. 1986, 3 頭; 朝日村高根, 16. vi. 1986, 25 頭; 岩船郡関川村沼, 12. vi. 1986, 2 頭; 南蒲原郡下田村吉ヶ平, 11. vi. 1986, 23 頭; 中頸城郡妙高高原イモリ池, 25. vi. 1986, 11 頭。
(高橋, 神奈川県平塚市; 高桑, 神奈川県立博物館)

馬場金太郎先生の思い出

久保田 正 秀

馬場金太郎先生と初めてお会いしたのは、私が東京農大の学生だった頃であるから、もう20年ほど前のことになる。おそらく甲虫談話会の年末の例会のときのことで、壇上でお話しする先生はとても大きなかたに見えた。そのあとの忘年会ではじめてご挨拶したが、実際には小柄なかたであったのは意外であった。存在自体が大きな先生であったのでそのように見えたのであろう。

馬場先生のお名前を初めて耳にしたのは、さらにその数年前、水戸で戦前から昆虫を調べておられた日置正義先生からで、サドマイマイカブリを交換してもらったという内容の話であったが、ずいぶんと親しみのある語りぶりが印象に残っている。

そんなこともあり、初対面の馬場先生にご挨拶をしたわけであるが、馬場先生は私の髭を見て「おまえはキューバのカストロだ。さあ酒を飲め」と応えて下さったのがとても思い出深い。その後何度か宴会の末席に加えさせていただいたが、お体を悪くされてからは自ら杯はとらなくなったものの、戦前からの筋金入りの虫屋という雰囲気は失われておらず、密かに敬服していた。

その馬場先生には、我々若輩の間にいくつかの逸話が伝えられている。「近寄りたたい採集ポイントにヘリコプターを飛ばした」「メクラチビゴミを採

るのに崖をブルドーザーで崩した」「ひとつの採集ポイントを何時間も動かない先生の脇で運転手がじっと見守っている」等々。私には直接確める勇氣はなかったが、どうやらまったくの作り話でもなかったようである。

虫を採ることに熱心で、常々「昆虫採集学」を提唱されていた先生には、そのご体験をもとにした成書をおまとめいただきたいとお願いしたことがあった。その時には平嶋先生とのお話が進んでいたようで、私が考えていたものは実現しなかったが、大部の本が九州大学出版会から発行され、馬場先生の「昆虫採集学」の一端に触れられるようになったことは喜ばしいことである。

1986年8月、神奈川県立博物館で開かれたネクイハムシ研究会の折、先生はたくさんのオオネクイハムシをお持ち下さり「存分に検ってください」というお言葉であった。今号で高橋・高桑さんが検討し、報告されているが、*Plateumaris constricticollis babai* は新潟県を中心に興味深い分布状況を呈し、その形態は先生のお好きだったマイマイカブリにも似た変異をあらわす。馬場先生亡き後も、私たちの *babai* とのお付き合いは当分続きそうである。

(千葉県野田市)

平山修次郎氏著「原色甲虫図譜」中に現れた新名について

黒沢良彦

平山修次郎著、原色甲虫図譜(1940,東京,三省堂)は日本が太平洋戦争に突入する丁度1年前の昭和15(1940)年の暮れに発行された図鑑で、私たち昆虫少年の甲虫への夢を掻き立ててくれた図鑑であった。その内容は、平山氏の原著、原色千種昆虫図譜(1933,東京,三省堂)の中の甲虫の部分18図版、および原色千種統昆虫図譜(1937,東京,三省堂)の同じく甲虫の部分14図版を抽出し、それに新たに20図版を加えて編集し直したもので、1,100種1,137頭が収録されている。しかし、出版の翌年に太平洋戦争に突入したために出版事情が悪化し、そのまま終戦となってしまったので、版を重ねることなく絶版となってしまった。

収録されている1,100種は台湾や朝鮮半島を含む旧日本領全域の大型美麗種を網羅しているために今でも台湾などの種名を調べるのに重宝がられている。しかし、これらのうち下記の6種は本書の出版される以前にはその記載が見当たらない。

1. ダイセンタマ *Coraeus daisensense* MIWA (p. 70, pl. 27, fig. 3) (ミヤマナカボソタマムシ *Coraeus montanus* MIWA et CHÛJÔ, 1940)
2. コウトウセスジタマ *Iridotaenia kotoensis* MIWA et CHÛJÔ (p. 71, pl. 27, fig. 11) (コウトウセスジタマムシ *Iridotaenia kotoensis* MIWA et CHÛJÔ, 1940)
3. アカバソタマ (変種) *Agrilus viridri* LINNAEUS var. (p. 72, pl. 27, fig. 18) (アカバナガタマムシ *Agrilus sinuatus yohoyamai* Y. KUROSAWA, 1975)
4. カセウトウアヲゴマフザウ *Konorrhynchus samasanensis* MIWA et HIRAYAMA (p. 79, pl. 29, fig. 1) (ゴマフニセカタゾウ *Eupyrigops samasanensis* (MIWA et HIRAYAMA, 1940))
5. ウスキホシテントウ *Synharmonia hirayamai* YUASA (p. 170, pl. 52, fig. 23) (ウスキホシテントウ *Synharmonia hirayamai* YUASA, 1963)
6. ジウロクテナウ *Neomysia nipponica* YUASA (p. 172, pl. 52, fig. 38) (シロジュウロクホシテントウ *Neomysia nipponica* YUASA, 1963)

各種の最後の括弧内の種名は現在使用されている種名である。

これらの種類について、平山氏は「はしがき」の中で、「付記：第52図版の23図及び28図の学名は、湯浅啓温氏が、近く新種として、発表せられるはずのものである。なお、第29図版の1図も未発表のものであるのに、本書に掲載したことをお断りしておく。」と断っている。しかし、本書では、原色図版と共に各種について、数行ではあるが、一般的な形態の記載があるので、これを無記載 (nomen nudum) とすることは出来ない。したがって、本書を上記各種の最初の有効な記載と認めないわけにはいかない。もちろん命名者は平山修次郎氏自身であ

る。

蛇足ながら各種について解説を加えてみる。

1. ミヤマナカボソタマムシ *Coraeus daisensense* HIRAYAMA, 1940

Coraeus daisensense HIRAYAMA, 1940, Genshoku-Kôchû Zufu: 70, pl. 27, fig. 3.

Coraeus montanus MIWA et CHÛJÔ, 1940, Nippon no Kôchû, 3 (2): 14, pl. 7, fig. 14.

Coraeus daisensense の種名は鳥取県大山にちなむものである。したがって *daisensense* は *daisensense* の誤植と考えられる。一方属名は男性形であるから種名も男性形の *daisensense* に改めなければならない。また、和名に先占権はないので適当と思われる。ミヤマナカボソタマムシを残した。

2. コウトウセスジタマムシ *Iridotaenia kotoensis* HIRAYAMA, 1940

Iridotaenia kotoensis HIRAYAMA, 1940, Genshoku Kôchû Zufu: 71, pl. 27, fig. 11.

Iridotaenia kotoensis MIWA et CHÛJÔ, 1940, Nippon no Kôchû, 3 (2): 56 & 66, pl. 7, fig. 13.

平山氏の図譜の発行が昭和15(1940)年12月25日、三輪勇四郎、中條道夫両博士の論文の発行が昭和15(1940)年12月30日であるから、平山氏の方に先占権を認めないわけにはいかない。ミヤマナカボソタマムシは従来の学名の種名と命名者を、コウトウセスジタマムシは命名者を変更しなければならない。

3. アカバナガタマムシ *Agrilus sinuatus yohoyamai* Y. KUROSAWA, 1975

Agrilus viridri LINNAEUS, var.: HIRAYAMA, 1940, Genshoku Kôchû Zufu: 72, pl. 27, fig. 18.

Agrilus sachalinensis: IGA, 1955, Coloured Ill. Ins. Jap., Osaka: 8, pl. 4, fig. 49 (nec OBENBERGER, 1935).

Agrilus sachalinensis OBENBERGER, ab. *yohoyamai* IGA, 1955, Coloured Ill. Ins. Jap., Osaka: 8.

Agrilus sinuatus yohoyamai Y. KUROSAWA, 1975, Coleopterists' News, (25/26): 1.

本種の種名が上記の通り確定するまでの詳しい経過については本誌25/26号において述べたのでここでは省略する。

なお、三輪、中條両博士が1940年の論文で付記的に樺太から記録した、*Agrilus viridri* LINNÉ var. は、はっきりどの種と特定出来ないが、本種ではないことは確かである。

4. ゴマフニセカタゾウ *Eupyrigops samasanensis* (MIWA et HIRAYAMA, 1940)

Pachyrrhynchus sp., KATO, 1933, Genshoku

Nippon Konchū Zukan, Tokyo, 9, pl. 23, fig. 9.

Apocrytus kashotonis KANO, 1935, Nippon Gakujutsukyokai Hōkoku, Tokyo, 10 (1): 1 (nom. nud.).

Konorrhynchus samasanensis MIWA et HIRAYAMA, 1940, Genshoku Kōchū Zufu, Tokyo: 79, pl. 29, fig. 1.

Kashotonus multipunctatus KŌNO, 1942, Insecta Matsum., Sapporo, 16: 28.

Eupyrigops samasanensis: Y. KUROSAWA, 1992, Coleopterists' News, Tokyo, (100): 7-9.

本種の学名については、本誌 100 号で詳しく論じたので、そちらを参照されたい。

5. ウスキホシテントウ *Synharmonia hirayamai* HIRAYAMA, 1940.

Synharmonia hirayamai HIRAYAMA, 1940, Genshoku Kōchū Zufu, Tokyo: 170, pl. 52, fig. 23.

Synharmonia hirayamai NAKANE (nec YUASA), 1963, Fragmenta Coleopterologica, Kyoto, (3): 12.

6. シロジュウロクホシテントウ *Neomysia nipponica* HIRAYAMA, 1940.

Neomysia nipponica HIRAYAMA, 1940, Genshoku Kōchū Zufu, Tokyo: 172, pl. 52, fig. 38.

Neomysia nipponica NAKANE (nec YUASA), 1963, Fragmenta Coleopterologica, Kyoto, (3): 12.

上記 2 種のテントウムシは、農林省農業技術研究所の総務部長であった湯浅啓温博士が平山氏に新種で、近く上記の学名で記載するはずである旨を告げられたものを、平山氏が湯浅博士の記載の発表を待たずに図示してしまったものである。湯浅博士は、昭和初期における日本の代表的な甲虫学者であったが、激務に追われ新種の記載はほとんど残すことなく、昭和 28 (1953) 年 10 月 21 日に過労のため急逝された。博士の後輩でもあり弟子でもあった中根猛彦君は湯浅博士の記載された新種の少ないことを惜しみ、何とか日本の甲虫相の中に YUASA の名のついた種類をと思いつけたのが平山氏の上記 2 種のテントウムシであった。1963 年、彼は彼の主

宰する雑誌 *Fragmenta Coleopterologica* の 3 号に何の断り書きもなく、湯浅博士が発表した論文の形式にして、平山氏の図譜に命名者が湯浅博士となっているテントウムシ 2 種を新種として発表した。そのために湯浅博士の死亡後 10 年も経てから博士の幽霊が新種を記載したことになってしまった。しかも *Neomysia nipponica* の holotype が、なんと滋賀県比良山で 1957 年 6 月 4 日に採集された♂である。幽霊が自分の死亡後に採れた標本に命名している! 佐々治寛の博士は平山, 1940 を無記載 (nomen nudum) とし、湯浅, 1963 (実際は中根, 1963), を有効な記載と認めているが、平山氏の図譜に数行であるが記載があり図もあるので、平山, 1940 を有効と認めないわけにはいかない。上記 2 種のテントウムシの命名者は YUASA, 1963 から、HIRAYAMA, 1940 に改めるべきであろう。

なお、これは今回の報文には関係ないが、平山氏の図譜の第 27 図版第 9 図のタカサゴムツボシタマ *Chrysobothris infranitens* KERREMANS はボルネオ島タワオ (Tawau) 産の *Chrysobothris militaris* H. DEYROLLE, 1864 の誤りで、これは平山氏の採集人であった金子富雄氏の採集品が混合されたものである。また第 13 図は北アメリカから米松材について輸入された *Cypriacis aurulenta* (LINNÉ, 1767) で、日本に特産する *Buprestis (Stereosa) niponica* HOSCHECK, 1930 ではない。

主な参考文献*

平山修次郎, 1940. 原色甲虫図譜, 東京, 三省堂, 253 pp, 52 pls.

伊賀正汎, 1955. 原色日本昆虫図鑑 (上) (近畿甲虫同好会編), 大阪, 保育社, 甲虫編, タマムシ科, ed. 1, pp. 1~12, pls. 2~4.

黒沢良彦, 1992. ゴマフニセカタゾウの正体. 甲虫ニュース, (100): 7~9, fig. 1~10.

三輪勇四郎, 中條道夫, 1940. 日本産タマムシ科の新種及稀種図説. 日本の甲虫, 3 (2): 53~74, pl. 7.

SASAJI, H., 1971. Fauna Japonica, Coccinellidae (Insecta: Coleoptera), Tokyo, 350 pp., 16 pls.

YUASA, H. (T. NAKANE), 1963. Two new species of Coccinellidae from Japan. *Fragmenta Coleopterologica*, (3): 12.

* ゴマフニセカタゾウに関する文献は本誌 100 号に述べてあるので省略した。

(東京都世田谷区)

○千葉県のアオコガネ続報

本誌 61 号に、千葉県印旛郡からのヒラタアオコガネ (*Anomala octiescostata* BURMEISTER) の記録を報告したが、その後、同地に近い八千代市で引続き採集しているので報告する。最初に本誌に報告した個体は 10 月末に採集したが、その後、八千代市周辺ではその時期には採集しておらず、すべて本種の通常の出現期の初夏である。黒沢良彦博士は、採集場所がゴルフ場またはその周辺である事から、芝ま

たは樹木等について移入された可能性を指摘されたが、最初の頃の出現期の乱れはあるいはその理由によるものかも知れない。5 月頃には普通に見られ、とくに 1988 年には夥しい数が見られたが、薬剤散布がされたものと思われ、芝草の根元に頭をつっ込むようにして死んでいるものがほとんどで生体は 1 頭のみであった。通常は朝夕活発に飛翔するのをよく見かける。1992 年にはコアオハナムグリ、アオアシナガコガネと共にモッコクの花に相当数が集

まっていた。移入されたとしても現在ではこの地域に完全に定着しているものと思われる。

千葉県印旛郡白井町, 29. x. 1982, 1頭; 千葉県八千代市, 21. v. 1988, 8頭; 八千代市, 20. v. 1990, 1頭; 八千代市, 17. v. 1992, 4頭。

(東京都大田区, 木村欣二)

○ヒメカタゾウムシ兄島からの記録

ヒメカタゾウムシ *Ogasawarazo rugosicephalus* (Kôno) は小笠原(父島, 母島)に分布し, 母島のもは MORIMOTO (1981) により母島亜種として分けられた。筆者は最近, 父島のすぐ隣に位置する兄島より得られた本種を検査する機会を得たので記録しておく。

東京都小笠原兄島, 31. viii—5. ix. 1992, 12♂7♀ 苧部治紀採集。

父島の基亜種は(1)♀で上翅の周縁部にある毛が長いこと(母島亜種はすべて同じ長さ)と(2)肢の色が黄褐色から褐色(母島亜種は暗褐色)であることで母島亜種から区別できる。父島に近い兄島で得られた個体は(1)の点では父島の基亜種の特徴に当てはまるが(2)の肢の色は暗褐色であった。♂の交尾器は父島の基亜種で母島亜種に比べて長い陰茎甲をもっておりその点では兄島の個体も同じであった。また本種の上翅鱗片の色には変異が多いが兄島の個体では♂で緑灰色, ♀では銅灰色と安定していた。

末筆ながら貴重な標本を提供して下さった東京農業大学の苧部治紀氏に御礼申し上げる。

参考文献

MORIMOTO, K., 1981, *J. Fac. Agric. Kyushu Univ.*, 25(4): 175-199.

(九州大学農学部昆虫学教室, 小島弘昭)

○ベレンキベリノコギリクワガタのバンガイ島における記録

ベレンキベリノコギリクワガタ *Prosopocoilus fabriciei* LACROIX は、インドネシアのセレベス島東方にあるベレン島(Peleng Is.)に分布する美しいノコギリクワガタで、ベレン島の特産種とされている。



る。

筆者の手に、ベレン島の南東部にあるバンガイ島(Banggai Is.)産の本種の標本があるので報告しておく。

Banggai Is., Indonesia, May 1991, 1♂。

写真のように大歯型の個体で、上翅の黒色部がやや大きい。ベレン島産のものも個体変異がかなりあるので、1♂のみでは安定した特徴かどうか不明である。(東京都台東区, 藤田 宏)

○ヒラヤマコブハナカミキリを南ア広河原で採集

ヒラヤマコブハナカミキリ *Enoploclerus bicolor* OHBAYASHI は、最近の研究によって、その分布の中心が低山域にあり、アカメガシワなどの樹洞に生息することが判明した。筆者は、本種の生息環境としては例外的な高標高地と思われる、南アルプス広河原で採集したので記録しておく。

山梨県中巨摩郡芦安村広河原, 3. VIII. 1991, 1♀ (死体), 芳賀 馨採集・保管。

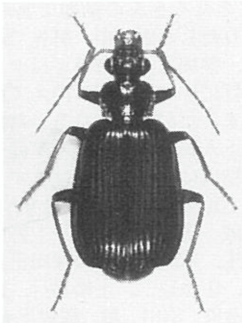
ブナでない広葉樹の倒木の折れ口付近を叩き網したところ落下した。破損が進んでいるので、かなり長期間風雨にさらされたものと思われる。おそらく、寄生木が冬期に樹洞から折れ、蛹室が露出して新成虫が凍死したものであろう。採集地点は大樺沢出会に近い標高1560 mの林内で、ブナクラス植生のほぼ上限であった。(川崎市高津区, 芳賀 馨)

○ヌバタマノクロアトキリゴミムシの再発見

ヌバタマノクロアトキリゴミムシ *Setolebia nubatama* (HABU, 1957) は、日本産のゴミムシ類のうちでも希少種のひとつに数えられる。1952年7月5日に、山梨県の金山峠で、大野正男氏が採集された2点の標本(ともに♂)に基づき、『昆蟲』第25巻25~29ページに記載されたが、度重なる探索にもかかわらず、その後ふたたび記録されることがなく、土生博士の2度にわたる詳しい再記載も、すべてこれらの基準標本に基づいてなされた。とくに1988年6~9月には、腕利きの人々による瑞牆山麓周辺域特定昆虫類生息実態調査が実施され、本種も重要対象種のひとつに挙げられたが、新しい標本は結局1びきも採集されなかった。

ヌバタマノクロアトキリゴミムシが、これほど注意を惹いてきたのにはわけがある。もちろん個体数の少ないことも、大きい理由のひとつではちがいないが、それよりもこの種が、わずか2種で構成されている小さい属の、日本の代表者である点に重要な意義がある。しかも、他の1種 *S. sterbai* (JEDLIČKA, 1931) も、確実な記録としては、中国雲南省の Soling-ho から、やはり2点が知られているにすぎない。

ところで、5月28~30日に行なわれた本年度の採集例会で、この種の標本1点が、実に41年ぶりに久保田正秀氏によって得られた。採集地点は基準産地である金山峠の1 km あまり南方で、低木のスイーピングによって捕らえられたものだということである。採集データは次のとおり。



1♂, 山梨県北巨摩郡須玉町金山, 標高 1,320 m, 28-V-1993, 久保田正秀採集 (国立科学博物館に保管).

写真でもわかるように、この幻の虫は一見なんの変哲もなく、全体にまっ黒のヒラタゴミシ類に似た外見をしている。樹上で飛翔力のあるこのような肉食性の甲虫が、金山付近に局在しているとは考えられないので、これまでもカミキリムシやハムシなどの愛好者によって採集されている可能性が高い。この記録を契機にして、新しい発見、ことに埋もれている標本の発掘がづくことを期待したい。

(国立科学博物館, 上野俊一)

◇会員動静◇

◎新入会

早川広文 (松本市), 石蔵 拓 (東京都北区), 小林博隆 (東京都世田谷区・日大林学), 松田吉弘 (茨木市), 守屋博文 (津久井郡津久井町), 村本理恵子 (東京都杉並区), 中田勝之 (金沢市), 清水清市 (西春日井郡師勝町), 高橋義寛 (仙台市泉区), 豊田浩二 (東京都世田谷区・東京農大昆虫)

◎退会

松永善明, 渡辺光行, 山地正博

◎認定退会

上坂幹夫, 大垣 誠, 上野紀武, 横島義弘

(庶務担当, 岩田隆太郎)

◇例会報告 (1)◇

1993年第1回例会を3月20日(日)午後1時30分より、東京都世田谷の日本大学農獣医学部東京校舎1号館2階121講義室で行ないました。講演は、新井久保氏(東京都豊島区)による「アマゾンの自然と昆虫—ペルーウカヤリ川源流部を中心にした甲虫類の生態—」。再度の南米調査から帰国されたばかりの新井氏はたくさんのスライドを交えて、臨場感溢れる講演で楽しませていただきました。また当日持参された、ふだん見る機会の少ない多数の南米の甲虫類標本は、講演前から休憩時間、講演後も参加者の目を釘付けにしていました。

少憩の後の一人一話は、例によって多彩な話題が披露され、名残惜しく午後5時散会しました。

講演された新井氏、藤沢移転をひかえた日大農獣

医学部の会場使用に尽力された岩田隆太郎氏にお礼申し上げます。

出席者氏名(50音順): 新井久保, 石蔵 拓, 岩田隆太郎, 上野俊一, 久保田正秀, 倉田道夫, 黒佐和義, 小林博隆, 酒井 香, 榎原陽一, 妹尾俊男, 田尾美野留, 露木繁雄, 中村俊彦, 西山 明, 鎌倉正人, 平野幸彦, 堀川正美, 横原 寛, 益本仁雄, 森田誠司, 山崎茂夫, 渡 弘 (以上23名).

(例会担当, 久保田正秀)

◇特別例会報告◇

1993年4月3日~6日, 日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会合同大会が長野県松本の信州大学で開催されましたが, 大会期間中の4月5日(月)午後5時より8時まで, 特別例会として「甲虫類小集会」を日本甲虫学会との共催で行ないました。

講演は曾田貞滋氏「オサムシ亜族の生活史進化」・平沢伴明氏「クワガタコガネ類の系統関係」の2題。

(特別例会担当, 佐藤正孝)

特別例会講演要旨

オサムシ亜族の生活史進化

曾田貞滋 (信州大学理学部・生物)

オサムシ亜族の生活史は、季節利用に関して春繁殖で幼虫越冬休眠をおこなわないタイプと、秋繁殖で幼虫が越冬休眠をおこなうタイプに分化しており、さらに幼虫食性に関して、鱗翅目・双翅目などの昆虫幼虫食、カタツムリ食、ミミズ食に分化している。こうした生活史特性の進化と系統進化の関係を、現在までの知見に基づいて整理すると、春繁殖型は3つの高次分類群に共通にみられるが、真正オサムシ群はミミズ食であり、多条オサムシ群とトゲオサムシ群では昆虫の幼虫食が共通にみられるものの、ミミズ食はみられない。しかし多条オサムシ群ではカタツムリ食がみられ、それにとまう大卵少産化傾向がある。また、多条オサムシ群の一部は秋繁殖型であるが、これは他の群にはみられない。

秋繁殖型オサムシの系統群は、春繁殖型にくらべより寒冷な生息地まで分布している。これには、幼虫・成虫両方のステージで越冬休眠が可能であり、1シーズンが短い環境でも幼虫発育を2シーズンに分割しておこなえること、成虫1年目の繁殖をおこなわず2年1化の生活史に変更できることが、有利な点として考えられる。

クワガタコガネ類の系統関係

平沢伴明 (片倉工業・生物科学研究所)

演者はここ数年、東南アジアに産する特異な形状を持つコガネムシの一群であるクワガタコガネ類について、強い関心を抱いてきた。このうち、ムツモンクワガタコガネ *Fruhstorferia sexmaculata* を含む亜属 *Kibakoganea* は、独立属とすべきことを報告し(平沢, 1992)、併せてその特徴を再記載して、所属する種を列挙した。

今回は、残された真正の *Fruhstorferia* 属の各種について、最新の材料を用いた再検討の結果を述べ、その系統関係を推定してみたい。

◇第17回名古屋支部大会の記◇

1993年3月7日、午後1時30分から名古屋女子家政学部で行なわれた。例によって一人一話から始まり、休憩を挟んで3氏の講演があった。

佐藤正孝氏：沿海州採集談

清水清市氏：ボルネオ採集談

現地の風景や昆虫のスライドを示し、話題も豊富であった。

齊藤秀生氏：Pidonia の話

招待講演をお願いした齊藤氏は、明子夫人同伴で豊富な標本や図表のスライドを駆使し話された。分類・地理的分布・垂直分布など話題は尽きない。終って有志の懇親会を開き、齊藤夫妻を見送った。

出席者氏名

秋田勝巳、伊沢和義、石田勝義、太田克人、岩崎博、伊藤芳教、蟹江昇、河路掛吾、桐山功、佐藤正孝、齊藤秀生、齊藤明子、坂上光一、清水清市、杉村明道、高井泰、豊島亮司、野平照雄、長谷川道明、穂積俊文、前嶋孝雄、山本雅人、吉富博之、以上23名。(穂積記)

◇例会報告(2)◇

1993年第2回例会は、恒例の採集談話会として5月29、30日に、山梨県北巨摩郡須玉町金山で行ないました。宿舎は金山山荘。28日からの宿泊者7名。29日は23名の参加者でした。1991年、92年と雨にたたられましたが、今回は30日朝までは何とか持ちこたえ、29日は絶好の採集日和に恵まれました。宿舎付近は標高1380m、木賊峠は1600mを越えるところであって、5月末とはいえカエデやズミが満開でした。採集結果は、それぞれの参加者がそれぞれに、とっておきましょう。夜は渡辺会長の挨拶、草間名誉会員の乾杯後、山菜料理を囲んで話がはずみました。地酒で喉が潤った後一人一話に移り、い



(沼田稔氏撮影)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00、0、1、2、3、4、5、6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話 (03)3409-6401(ムシは一番)

FAX (03)3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

つもに増してのたくさんの話題で盛り上がりました。翌朝は降りだした雨の中、軒先で記念撮影後散会しましたが、参加者の半数ほどはヤマトヨダンハムシをおみやげにすべく雨中に消えて行きました。

最後になりましたが差し入れをいただいた渡辺泰明会長・雛倉正人氏、夜間採集の準備をお手配いただいた沼田稔氏にお礼申し上げます。

出席者氏名(50音順)：青柳鷹之介、出雲善浩、出雲美恵子、石蔵拓、上田康之、上野俊一、大木裕、笠原須磨生、草間慶一、久保田正秀、曾根信三郎、高橋鉄也、田添京二、土橋秀行、露木繁雄、西川喜朗、菲沢幸世、沼田稔、雛倉正人、平野幸彦、渡辺泰明、渡辺美智子、渡弘(以上23名)。

(例会担当、久保田正秀)

「編集後記」

◎本号から4号、1年間タイへ昆虫採集に行っている妹尾幹事から、『甲虫ニュース』の編集をバトンタッチしました。105号までのお付き合いですがよろしく願いたします。◎さて、その最初の号が馬場金太郎先生の追悼号となってしまいました。急なことで十分なことはできませんでしたが、それでもたくさんの方々が原稿をお寄せくださいました。これも馬場先生のお人柄故のことと思います。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。◎なお、本号木元新作先生の記事中に掲載された文献類には残部があるものもありますので、ご希望の方は次までお問合せ下さい。〒830 久留米市旭町67 久留米大学医学部生物 木元新作先生 (久保田正秀)

甲虫ニュース原稿送付先

1994年3月末まで

〒278 野田市堤台438-32 久保田正秀宛

1994年4月から

〒196 昭島市昭和町2-5-15-601 妹尾俊男宛

日本鞘翅学会

会費(一カ年)5,000円、次号は1993年9月下旬

発行予定

発行人 渡辺泰明

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311、振替東京8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥7,000、桐合板製インロー型標本箱大 ¥2,500、送料一箱につき都内及第一地帯：4個以下 ¥1,600、5個以上 ¥1,000(以下同様)、第2地帯 ¥1,800、¥1,100、第3地帯 ¥2,000、¥1,250、其他、各種器具、針などを製作販売。カタログを御請求下さい。(¥62)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島2-21-25

電話(03)3811-4547、振替6-113479